

国立東京療養所にて

復活

――ルカ伝第24章1～43節――

1959年4月25日

小池辰雄

身証せるキリスト エマオのイエス 受ける砕け 最大の賜物 すべてを貰くキリストの光

【ルカ24・1～43】

1 一週の初の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。² 然るに石の既に墓より転ばし除けあるを見、³ 内に入りたるに、主イエスの屍体^{しかばね}を見ず、⁴ これが為に狼狽^{うろた}えおりに、視よ、輝ける衣を著^きたる二人の人その傍ら^{かたわ}に立てり。⁵ 女たち懼れて面を地に伏せれば、その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。⁶ 彼は此処に在^{いま}さず、甦^{よみが}えり給えり。尚ガリラヤに居給えるとき、如何に語り給いしかを憶^{おも}い出^いでよ。⁷ 即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付^{わた}され、十字架につけられ、かつ三日めに甦^{よみが}えるべし」と言い給えり』⁸ ここに彼らその御言を憶い出で、⁹ 墓より歸りて、凡て此等のことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。¹⁰ この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハンナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。¹¹ 使徒たちは其の言を妄語^{たわごと}と思いて信ぜず。¹² 「ペテロは起^たちて墓に走りゆき、屈^{かが}みて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ歸れり」

¹³ 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、¹⁴ 凡て有りし事どもを互に語りあう。¹⁵ 語りかつ論じあう程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。¹⁶ されど彼らの目遮^さえられて、イエスたるを認むること能わず。¹⁷ イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』かれら悲しげなる状^{さま}にて立ち止り、¹⁸ その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓^{やど}り居て、独^{ひと}り此の頃かしこに起りし事どもを知らぬか』¹⁹ イエス言い給う『如何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業^{わざ}にも言^{ことば}にも能力^{ちから}ある預言者なりしに、²⁰ 祭司長ら及び我が司^{つかさ}らは、死罪に定めんとて之を付^{わた}し遂に十字架につけたり。²¹ 我らはイスラエルを贖^{あがな}うべき者は、この人なりと望みいたり、然のみならず、此の事の有りしより今日はや三



日めなるが、²²なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝夙く墓に往きたるに、²³屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。²⁴我らの朋輩の数人もまた墓に往きて見れば、正しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき²⁵イエス言い給う『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信するに心鈍き者よ。²⁶キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』²⁷かくてモ―セ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。²⁸遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、²⁹強いて止めて言う『我らと共に留れ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたもう。³⁰共に食事の席に著きたもう時、パンを取りて祝し、擘きて与え給えば、³¹彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えずなり給う。³²かれら互に言う『途にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我らの心、内に燃えしならずや』³³かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、³⁴『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』³⁵二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち『平安なんじらに在れ』³⁷と云い給う。³⁸かれら怖じ懼れて、見る所のものを霊ならんと思ひしに、³⁹我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』⁴⁰『斯く言いて手と足を示し給う』⁴¹かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』⁴²かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、⁴³之を取り、その前にて食し給えり。

●身証せるキリスト

1 一週の初の日、朝まだき、女たち備えたる香料を携えて墓にゆく。

キリスト教でいうと、一週の初めの日曜日です。キリストの復活の日になる。金曜日に十字架にかかり、ユダヤの安息日たる土曜日はそのまま放っておかれたわけです。

2 然るに石の既に墓より転ばし除けあるを見、

岩盤が前にあり、ローマの兵隊たちが死体を盗みに来る者がいると困るので守っていた。

3 内に入りたるに、主イエスの屍体を見ず、⁴これが為に狼狽えおりにしに、視よ、

輝ける衣を著たる二人の人その傍らに立てり。⁵女たち懼れて面を地に伏せ

たれば、その二人の者いう『なんぞ死にし者どもの中に生ける者を尋ぬるか。

⁶彼は此処に在らず、甦えり給えり。尚ガリラヤに居給えるとき、如何に語



り給いしかを憶い出でよ。⁷即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架につけられ、かつ三日めに甦えるべし」と言い給えり』

キリストは甦ることを既に三回告示しておられた。けれども、誰もそれを本当には受けとっていない。ですから、十字架にかかり葬られて、失望落胆というわけです。まことに「せん方尽きて」望みを失っている。ところが、イエスは甦られた。キリストは、

「私は神の国を、永遠の生命を与えに來たのだ」

と。その事実を最後に、地上における彼の生涯ではっきり現わされたわけです。だから、イエスの素晴らしい霊的な力に出つくわして、病がいやされたり、目が開いたり、いろいろなことがありました。

しかし、彼らはキリストの言を聞いているのだけれども、ひとつもそれは魂の世界に化体していない。もしそれが本当であつたならば、

「イエスが十字架にかかつて、これは必ず復活したもう」

と、誰か一人くらいでも信じていいわけです。ところが、一番弟子のペテロですら、また、他のたくさんの弟子たちのうち誰ひとりとしてこれを受けとっていないかった。これが即ち、

「神の言を生まれつきの私たちは本当に受けとれない」

ということを彼らがはつきり証明していてくれている。

⁸ここに彼らその御言を憶い出で、⁹墓より帰りて、凡て此等のことを十一弟子および凡て他の弟子たちに告ぐ。¹⁰この女たちはマグダラのマリヤ、ヨハナ及びヤコブの母マリヤなり、而して彼らと共に在りし他の女たちも、之を使徒たちに告げたり。

「マグダラのマリヤ」は真つ先にキリストに出つくわした。七つの悪鬼を追い出されて、一番深く救われた人です。また、「ヤコブの母マリヤ」とは十二使徒の小ヤコブの母です。

¹¹使徒たちは其の言を妄語たわごとと思ひて信ぜず。¹²「ペテロは起ちて墓に走りゆき、

屈みて布のみあるを見、ありし事を怪しみつつ帰れり」

まだ、生前に仰つた通りだとは信じ得ずにいる。たわごとと思つて信じなかった。

人間の生み出すどんな美しいものも、どんな立派な思想も医学も、生命を与えることはできない。病気をなおすことはします。けれども、根源の生命そのものを与えるものは神・キリストのほかにはない。聖書は私たちに何を与えるか。死んでも死なない本当の生命を与えるのです。教えの書ではない。実は人間の一番欲しいものはこの生命なんです。世の中にどんな良きものがありましても、この聖書が与えるものとは桁違いです。だから、世界においてただ一つの本です。「ザ・バイブル」(The Bible)は、他の百万巻の本があつても聖書一卷にはかなわないのはそのわけです。

福音書で一番大事なところはどこですか。この復活のキリストのところですよ。復活のキリストが現れなかつたらば、このキリストのすべての言も、すべての行為も、その十字架も、



ついにむなしい。それは深刻なる悲劇である。けれども、偉大なる喜劇にはならない。勝利の「オラトリオ」(Oratorio 聖譚曲)にはならない。神の聖書は、ダンテ (Dante Alighieri, 1265～1321) の『神曲』(The divine comedy, La Divina Commedia) は「喜曲」というが、本当の大歓喜の書は聖書です。

⁷ 即ち「人の子は必ず罪ある人の手に付され、十字架につけられ、かつ三日めに甦えるべし」と言い給えり』

この「べし」は非常につよいギリシア語で、「甦らざるを得ない」ということをいったのであると、さきほど読みました。ところが、弟子たちはまず躓いてしまった。落第ですよ。

●エマオのイエス

¹³ 視よ、この日二人の弟子、エルサレムより三里ばかり隔りたるエマオという村に往きつつ、

「三里」は「60スタデオム」というギリシア語で、エマオはエルサレムから西の方にある。

¹⁴ 凡て有りし事どもを互に語りあう。¹⁵ 語りかつ論じあう程に、イエス自ら近づきて共に往き給う。

「えらい十字架の出来事でしたね」と論じているところにイエスが近づいて来た。

¹⁶ されど彼らの目遮えられて、イエスたるを認むること能わず。

霊体を着てキリストは歩いていく。だけど、イエスであることはわからない。「とうとう十字架にかかってしまつて」と嘆きながら話して歩いているのですから。

¹⁷ イエス彼らに言い給う『なんじら歩みつつ互に語りあう言は何ぞや』かれら悲しげなる状にて立ち止り、

「何をいったい二人で論じあったり、語りあったりしているのですか」と、呼びかける人があるのだ、悲しげなるさまにて立ち止まった。

¹⁸ その一人なるクレオパと名づくるもの答えて言う『なんじエルサレムに寓り居て、独り此の頃かしこに起りし事どもを知らぬか』

そこでイエスはしらはつくれて聞いた。しかし、単にしらはつくれたのではない。

¹⁹ イエス言い給う『如何なる事ぞ』答えて言う『ナザレのイエスの事なり、彼は神と凡ての民との前にて、業にも言にも能力ある預言者なりしに、

イエスをよく知っている。けれども、それは過去のことです。

「もつともつと大事なことをお前さんたちはわかっていないな」

というわけです。イエスは旧約の預言者よりも桁違いに素晴らしい預言者である。

²⁰ 祭司長ら及び我が司らは、死罪に定めんとて之を付し遂に十字架につけたり。

祭司長と司とはサンヘドリン (最高法院) の上役の人たちです。



21我らはイスラエルを贖^{あがな}うべき者は、この人なりと望みいたり、然のみならず、此の事の有りしより今日ははや三日めなるが、

ここで「贖う」といったつて、霊的な意味における贖いではないですよ。イスラエルを回復して政治的にも王国を建てて、ダビデの王国以上に素晴らしい王国を建ててくれる、そういう人だと思っていた。十字架の十字架たることはちつともわかっていない。

22なお我等のうちの或女たち、我らを驚かせり、即ち彼ら朝^{はや}夙^{はや}く墓に往きたるに、^{しかばね}23屍体を見ずして帰り、かつ御使たち現れて、イエスは活き給うと告げたりと言う。24我らの朋輩^{ともがら}の数人もまた墓に往きて見れば、正^{ただ}しく女たちの言いし如くにしてイエスを見ざりき』

という事実は一応認めているのですが、そのことの本当の喜びであることをちつとも受けとっていない。だから、「悲しげな状^{さま}にて」と、全然、第三者的な報道、新聞、珍聞ぐらいにしか思っていない。

25イエス言い給う『ああ愚^{おろか}にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍^{にぶ}き者よ。26キリストは必ず此らの苦難^{くるしみ}を受けて、其の栄光に入るべきならずや』

この「入るべきならずや」の「べき」も非常に強いギリシア語です。「栄光に入らないではいられないではないか」ということ。

27かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就^つきて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。

これは録音でもしておけば大したことですよ。キリストは諄々^{じゆん}と説かれた。全く二人の旅人は驚いたことに出つくわした。全然、使徒たちもヨハネ、ペテロも誰も言えなかったことを、この見知らぬ旅人がどしどし言つてのけたわけです。

「キリストはそういうものではないのか」

と言つて、三人称にして大いにそこを説明している。旧約聖書の大事なメシヤ預言のことを語られたわけです。

28遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、^{とど}29強いて止めて言う『我らと共に留れ、時夕に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたもう。

まだ進んでやまない。生命の世界を語つてやまない。

「もう夕方になったから、どうか一緒に宿屋に来てくださいよ」というので、イエスもその言葉に従つて中に入つて行かれた。

30共に食事の席に著^つきたもう時、パンを取りて祝し、擘^さきて与え給えば、

キリストは、「パンを取りて祝し、擘^さきて与え給えば」というのは、普段これをやっておられた。また特に最後の晩餐においてはこれをなされた。この二人は広い意味における弟子



ですから、最後の晩餐にはいなかったのですが、イエスがかつてなされたその姿をふと思
い出したわけです。そうしたら、

31 彼らの目開けてイエスなるを認む、而してイエス見えざるなり給う。
彼らの目が開けた。実は説明していたこの人がイエスであったと。

32 かれら互に言う『途^{みち}にて我らと語り、我らに聖書を説明し給えるとき、我
らの心、内に燃えしならずや』33 かくて直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、
十一弟子および之と偕^{とも}なる者あつまり居て言う、34 『主は実に甦^{よみがえ}りて、シ
モンに現れ給えり』35 二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘^{ちぎ}き給うに
よりてイエスを認めし事とを述ぶ。36 此等のことを語る程に、イエスその中
に立ち『平安なんじらに在れ』³⁷ 給う。37 かれら怖^{おそ}じ懼^{おそ}れて、見る所
のものを霊ならんと思ひしに、

彼らは、それを亡霊だと思った。相変わらずダメなんです。うわさをしたり、見たり、
少しは感じてダメです。みんなおじおそれて、見たものを變化^{へんげ}のものだと思っている。

38 イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒^{さわ}ぐか、何ゆえ心に疑惑^{うたがひ}おこるか、39 我が
手わが足を見よ、これ我なり。我を撫^なでて見よ、霊には肉と骨となし、我に
はあり、汝らの見るごとし』40 「斯く言いて手と足を示し給う」41 かれら
歡喜^{よろこび}の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此処に何か食物ある
か』42 かれら炙^{あひ}りたる魚一片^{ひとしき}を捧^たげたれば、43 之を取り、その前にて食し給えり。

という実に驚くべきことが書いてある。

イエスがこのような真の霊体をもつて永遠の生命を実証された。けれども、彼らはこれ
を見れども見ず、イエスなることを認めても、なおまだこれを本当に認めてはいなかった。
思い出からして、「ああ、これはイエスだ」と思ったが、イエスの方ではその時にさつと、

「イエス見えざるなり給う」

と。けれども、キリストは彼らの目が本当に見えていないけれども、

「見たことが本当に見えるようにしてやる、聞いたことが本当に聞けるようにして
やる」

と。これはキリストはちゃんとその先を見ておられる。即ち、

「ペンテコステの聖霊降臨を経れば、私の言ったこと、したことが本当の角度から
受けとれるようになる」

ということ。す。「アレテイヤ」「真理」というギリシア語は、「隠れたるものを露^{あらわ}に現わす」
という意味ですから、

「われは真理なり」

というときには、

「われは隠れたるものの現れなり」



ということです。彼の全実存がこの隠れたる者の現れですから、「真理」なんです。観念されている世界ではない。

●十字架で受けとる砕け

このエマオ途上を一緒に歩いてくださったキリスト。この場合は事実、キリストがこのようにして具体的に現れましたが、今や霊的な天界におられるキリストは私たち一人ひとりに御霊をもつて自由に臨んでくださる。その道が開けてある。それは申し上げている通り、いつも自分というものが抜けているときです。

東西の高位の宗教は、みんなこの角度です。我から抜けることです。仏教の禪宗の方では「放下^{ほうげ}」なんていう言葉を使いますが――「解脱」「離脱」だとか、あるいは「空」だとか、「無」だとかいう――自我のさばっている限りは、キリストの臨在は本ものではない。それではこの自我というものが、「われ」というものが本当に抜けたような「われ」になるためには一体どうしたらいいのか。

私たちは「人格」ですよ、人格はハッキリと個としての存在を持っている。神さまは一人ひとりをかけがえない者とするということとは、神との関係においてのみ真の意味をもつ。神との関係において真の質を持っている。神との関係を離れてみたら、個なんていうものは危なくてしょうがない。個として認めれば認めるほど、危なくてしょうがない。

もちろん、それは哲学の世界では個性、人格というものを絶対的に見ているのですが――今度は道德の法則の世界を考えることができますけれども、しかしそれはいくら哲学の世界で考えても、カントの哲学はその中に永遠的な真理を含んでいると思うけれども――カントの哲学は一体どこから来たかという、信仰の世界から来ているのです。ただそれは哲学の世界だから、信仰の世界から説明しようとはしないでだけです。

「善なる意志」は絶対に尊いものです。その人間の個としての、

「人格はそれ自体が目的性を持っているもので、他の手段となってはいかん」

というようなことをカントは言うし、

「自由とは自ら法則を立てて、その法則に従っていくときに真の自由であり、それがま

た本当に義務を果たすものである」

という。実に立派な概念です。けれども、一人もこれを実行することができない。このカントの哲学的真理をもうひとつ奥の世界から本当に支えるところの、それを実現する世界がある。

律法の世界は素晴らしい。モーセの十誡を知っているでしょ。これを本当に実行できれば、それは永遠の生命の世界です。律法を全うする者は永遠に生きる。しかしできない。実に律法を全うした者はナザレのイエス・キリストだけだった。彼だけは永遠に生きる生命を持っていた。私たちはこのモーセの律法を全うすることはできない。仕方がない。人間は



みんな罪びとであるから。

「罪の価は死なり」

であって、魂の滅びまでも来てしまう。そういう失われたる存在です。今もそうです。20世紀の私たち文化人もそうです。どんなに文化が素晴らしくたって、これは人間としてはみんな失われたる存在です。

ところが、日の下に新しきことが起きました。このどうにもならない事態を根底から支えているものが、それが神さまです。しかも、神さまはキリストを通してそのことをしておられる。みんな恩寵の下にある。信ずるも信じないもない。地球上の一切のものが太陽の下にあるように、キリストの救いの下にみんなある。ただ問題は、それを正面から「受けとるか、受けとらないか」だけです。何か資格ではない。

「私はこういう人間ですから、性格がこうですから、運命がこうですから、まだ聖書が解っていませんから」

なんていうのはひとつも問題にならない。今日、今晚、新しく聞かれた人たちが直ちにこの世界に突入してしまう世界です。

十字架上のキリストが片一方の十字架の盜賊に、

「今日、お前は我と共にパラダイスにあるべし」(ルカ23・43)

と言われた。これが福音の世界です。一番遅れている者が一番まつ先にキリストと一緒にパラダイスに入ってしまった。問題は、そこで自我が砕けたことです。「我」というものが砕けた。

福音書の中のキリストの例え話の中で最大なるものは、ルカ伝15章の「放蕩息子の話」です。この父は無条件に放蕩息子を迎え入れた。帰ってきた息子は父に平伏して、

「私はあなたの子供とは言えません。どうか雇人の一人として使ってください」

と言った。これは砕けたる魂です。この「砕けの魂」というのは、これは悟りではない。これはキリストの十字架を本当に受けとり得た人です。私たちは砕けられない。もし、本当に根源的に砕けているならば、キリストは十字架にかからなかった。

そういうわけですから、絶対に福音の世界は他の何ものとも違う。福音の世界はこのキリストの十字架に本当に来て、

「全身を目にして見よ、全身を目にしてキリストの十字架を仰いでごらん。天界に、私たちの魂に愛の十字架は立っている」

と。霊の十字架ですよ。そのキリストが懸けられた木は腐ってしまった。そんな作った物がたといあったって、そんなものを拝みに行ったっておかしいのですよ。この事実をもつて、昔も今も世の末までも立っているところの十字架に来て、

「ここで私はお前をすっかり救い上げてしまった。もう問題はない」



ということです。

儒教や仏教がどんなに素晴らしくても、他にどんな哲学があまりなくても、イエス・キリストの十字架の前にはもはや言葉がない。この真理の前には、絶対無条件の救い、贖いあがなの前には、何も及ばない。これは殉教者の死ではない。宗教的天才の殉教的な死ではない。彼は神の聖意をすっかり受けて、旧約聖書が示しているところの「羔の贖いこひつじ」です。十字架が本当に見えている人には必ず復活は見えている。復活のキリストが本当に見えないのは、未だ十字架が本当の意味において見えていないからです。この十字架が本当に、

「我れキリストと共に十字架につけられたり」

と。もう見えている世界ではない。本当に見えていたら、見ているうちに十字架の中に入ってしまう。必ずだんだんその中に入っていきますから。

キリスト教は、福音は、早わかりではありませんよ。「キリスト教早わかり」なんていういろんな本がありますが、そうではない。一回限りで来る人は、非連続の連続をもって進んでいく人です。

「またこの次があるから、今日はこのへんで」

なんていう人は、いい加減のところをやめてしまう人です。

今の若い人たちは、みな頭で受けとる人が大部分です。頭でもまあ初めはいいですよ。仕方がない。しかし、頭の世界を突き破って、心の世界に、魂の世界に、全身の世界に入って行こうとしないならばダメです。福音は頭ではいけない。

●最大の賜物

イエス・キリストこそが賜物たまものですよ。いろんな霊的な賜物を、それは求めてもいいけれども、霊的な賜物それ自体を目的として求めると、その信仰は御利益信仰になってしまう。聖書を見てごらんさい。福音書にしてもパウロの手紙にしても、最後に向かうところは、神の聖意を行うところに帰着する。その実存をもって神の栄光を現わす。一人ひとりの生活をもって神の栄光を現わすことです。

パウロがいつも言っているのは何ですか。「愛」です。コリント前書13章に書いてある「愛」は最大な賜物です。否、実に愛は賜物を絶したところの世界である。ナザレのイエス・キリスト、彼は愛そのものである。キリストこそが私たちの賜物中の賜物です。このキリストという賜物をいただいたら、そこから本当に愛の聖意をその人は行ずるような実存になっていきます。毎日の生活においてそれは現れていくわけです。その現れ方は千差万別です。また、その人によっていろんな特殊性を持っています。決して一様ではありません。

そういうイエス・キリストと共にあること。キリストと共に歩くには、聖霊のキリストが中に来てくださらなければダメです。エマオ途上の人が何も知らないでいたけれども、

「どうか私たちの宿屋に来てください」



と願ったら、キリストは、

「はい、入ろう」

と宿屋に入った。

「私の中に来てください、私たちの体の魂の中に、存在の中に来てください」

と。彼らは本当の意味を知らないで、

「とにかく来てください、一緒に御馳走を食べましょう」

と。そして、キリストは中に入って来て生命を与えた。キリストはパンをわけ与えた。生命を分かちました。

「我は生命のパンなり」

と、ヨハネ伝6章で言っている、生命のパンを分かちそのキリストの姿は、

「自分の生命を与えよう」

という姿です。生命を与えるキリストの姿を見て、やっと目が覚めた。即ち、中に入って、そしてその生命を分けてくださるという現実に来て、やっと目がさめた。

●すべてを貰くキリストの光

皆さん、

「聖書を読んでわかりました」

と、それだけではどうにもならない。聖書は本当に食らっていれば、魂の世界に力がきますから、あなた方の実存は展開せざるを得ない。だから、

「信仰と行為は一如だ」

と、私は言うのです。

「信じて、それから行為をどのように工夫しましょうか」

ではない。「信じる」とはそのように「食べる、受けとる」ことです。真に聖書を食らっているか、食らっていないかは、その実存をもつてわかる。食らっている人は必ず力が出る。私は、ここに御馳走があつた時に見ているだけで、

「これは何カロリーで、栄養がどうのこうの」

と、よく御馳走の内容がわかったとしても、実際は食べていないから、どうにも力が来ないから、動けなくてしかたがない。本当に食べれば力が来ますから活動ができますよ。

キリストという御馳走を食べると、今度は他のいろんなものを読んでも、味がちゃんとわかってくる。これを食べると、なんでも消化できる。

「キリスト教をやると狭くなって、仏教のことがわからなくなる」

なんて、冗談じゃない。私は素人だけれども、仏教の本を読んだって分かる。分かるどころではない。神・キリストの光でもつて、ちゃんとつかめてくる。そして、面白いです。みんなこれを消化してしまうから、キリストの酵素で。そういう素晴らしい世界ですから、



イエスという方は。だから、皆さんがこの生命を持てば、周囲の人に、

「何か知らないが、あの人には生命があふれているな。何か知らないが本当の喜びがある」

といって、言わず語らずのうちに実証されてくる。だから、そのような愛の生命は一切に勝つ。一切に勝つとは全てを救い上げていくということ。相手を倒すのではない。救い上げていく勝利が本当の勝利です。

「旅は道連れ世は情けで行きます」

というのが本当の勝利です。だから、天下無敵という。何を言われても、どんなに迫害されても、

「ああ、結構でございます。私の中にはキリストの生命が、愛がありますから」

と言って、みんな救い上げて、忍んで、迫害する人のために祈って行ける。

皆さん、お休みになる時に祈って、キリストの腕に手枕してください。キリストの右の腕にまくらして寝る——これはヒルティが『眠られぬ夜のために』という本の中で365日書いてくれましたが——簡単ですよ、それで完全に眠れる。本当の捨身というものをいただいているわけですから。パウロが、

「一切の秘訣を得たり」

というのは、そんな角度からです。どうか環境や運命や自分の信仰状態とか、自分のなにかかんとかと、人間はいろんなことでゴタゴタしますが、そんなものはみんな根源的にすつ飛ばして、そして素晴らしいのはただ主イエスだけです。ここにだけ焦点を置いて、右顧左眄せずにこの福音の世界を突っ走ってください。

「親鸞は一人も弟子を持たずそうろう」

と、『歎異抄』に書いてある。私も一人も弟子はない。皆さんはみなキリストのものです。人間小池なんて見ていたら、みんな蹟く。「小池先生」なんて、こんなのをまねされたら困る。ただ私が磁石みたいにして指しているものに向かってください。私はどんなに揺れても、キリストという磁極を指す磁鉄にされている。この磁鉄は私の信仰ではない。キリストの恩寵です。私は「自分の信仰」だなんていうものはありはしない。「キリストの信」がわがうちにありて、私を磁鉄になし給うたが故に——私は自分自身は揺れてしようがない者ですが——決して北を指すことにまちがいないという、これが恩寵です。このことに共鳴、共感する人は、私がどんなであろうとも、旅は道連れで神の国に向かって一緒にいきます。ところが、私の賜物とか私の何とかというものを相手にしている方は去って行きます。私は一人でいい。キリストだけを指して行きます。この自己を立てない無我、キリストがすべてであるという魂にされて歩みましょう。ハレルヤ、アーメン！

（『愛泉』誌第29号、1960年4月17日発行より転載）

